に惹かれたのはたぶん偶然ではないと思う。

（山口大学）

付記

『母という経験』は一九九一年平凡社から出版されました。私が読んだのは、一九九五年に文庫化されたものです。

『ぼくは勉強ができない』は平成五年、新潮社から刊行されました、平成八年に文庫化されました。

西脇順三郎の詩

彌永　信美

この前、この欄に書かせていただいたときは、婚約時代の妻に教えられたヴァルター・ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』のことを書きました。それからもう五年以上も経って、今度もまた妻に教わった詩人のことを書こうと思います。結婚してまだ間もないころ、はじめて名前を聞いた西脇順三郎のことを。

妻が西脇順三郎の詩を最初に読んだのは、学校の教科書だったと聞きました。ぼくは、学校にあまりまともに通わなかったせいでしょうか、あるいは妻とは年がだいぶ離れているためでしょうか、学校時代にその名を見た記憶はまったくありません。でも、おとなになってはじめてその詩に触れて、かえって強く、新鮮な驚きがあったのかもしれません。

それからしばらく、西脇順三郎の詩集やその関連の本をいくつか買ったり読んだりしました。といっても、実際に読み、本当に好きになったのは、初期の『Ambarvalia』の中の「Le Monde Ancien」のいくつかの詩と、そして戦後すぐに書かれた『旅人かへらず』だったと思います。事実、それらが西脇の大きな詩業の中でも、一番簡明で、かつ最もポピュラーなものでしょう。

西脇順三郎といえば(きっと)誰もが思い出すあの美しい三行――「(覆［くつがへ］された宝石)のやうな朝／何人か戸口にて誰かとさゝやく／それは神の生誕の日」――「天気」と題されたこの美しい三行があるだけで、日本の詩は日本という狭い世界を突き抜けて、世界の中に、あるいは世界という陽の光の中に輝き出しているように感じられます。もちろん、人が思い浮かべるのは、地中海の陽光、おそらくギリシアの、あるいはエーゲ海の島のみずみずしい朝でしょう。ヨーロッパの曙……。けれども、ギリシアやヨーロッパと限定されない、もっと広くて輝かしい自然／宇宙の息吹のようなものも、ここには感じられます。

西脇順三郎の途方もない教養には、ただ驚嘆するほかありません。高山宏氏が、あるところで「われわれは二十世紀前半の知の巨人たちの巨大な業績を食い潰して生きているにすぎない」という意味のことを書いておられましたが、南方熊楠や西脇順三郎のようなひとたちの信じがたい研鑽を思うと、そのことが痛切に実感されます（若いころの西脇が、毎日「泣きながら」英語の勉強をした、ということを印象深く読んだ記憶があります）。明治以来の日本の文化の大きな部分は、西欧への憧れによって成り立っていたと言えるでしょうが、南方や西脇は、そうした「憧れ」という「対他性」のようなものを一気に払いのけ、ヨーロッパ的教養の最も高い部分を自分自身のものとして生き、それによってまさに「世界」という広がりの中にみずからを置き、あるいは飛翔することができたのだろうと思います。

西脇は、イギリス留学とヨーロッパ体験から『Ambarvalia』という結晶のように、夢のように美しい作品を持ち帰りますが、それから世界大戦という暗い時代を経、武蔵野をはじめとする東京近郊の雑木林での長く孤独な散策を経て、もう一つのすばらしく美しい作品『旅人かへらず』を発表します。これは、たまたま単行本になっているのを見つけてもっていますが、これほど「一冊の本」として読むことが重要な本は多くないでしょう。これは「はしがき」以下、一から一六八までの番号を振った短章から成り立っていますが、単行本ではその一編一編が新たなページから書き始められています。中には二～三ページにわたるものもありますが、多くは三～四行、そしていくつかはたった一行の断章です。「西脇順三郎詩集」のようなかたちであとから編まれた詩集だと、一行や二～三行だけのために一ページを費やすことはありえないのですが、単行本では、ページをめくるごとに、ほとんど真っ白なページに、

「窓に／うす明りのつく／人の世の淋しき」とか、「自然の世の淋しき／睡眠の淋しき」、「かたい庭」、「やぶがらし」という短いことばが目に飛び込んできます。真っ白なページの右端にわずかに印刷された「かたい庭」という四字がこれほど人の心を打つ、ということ。これは、詩集というより、一つの究極の「本造り」、「本という物」造り、とも言えるでしょう（あるいは詩集という「物」はそうしたものであるべきなのかもしれません）。

この短い詩集の中に、何度「淋しき」ということばが出てくることか。そしてそれが白いページの中で、なんと深く心にしみ入ることか。この淋しさは（高見順は、それを「存在自身の淋しさ」と表現しているということですが）、ぼくには、瞬間の淋しさ、と感じられてなりません。あるいは「時間の淋しさ」と言い換えてもいいかもしれません。どんな一瞬も一瞬のうちに過ぎ去り、消え去っていく淋しさ。大切なもの、一生忘れられないもの、と思われた途端に、その一瞬は消え去っているでしょう。あるいは消え去っていく淋しさを感じた途端に、どんな一瞬もかけがえのないものと感じられ、そしてそれは否応なしに消え去っていくでしょう。そうした瞬間は、春夏秋冬、四季を通じて散りばめられているでしょうが、ぼくには春の淋しさ、花が咲き出した瞬間の淋しさほどの淋しさはないように感じられます。けれども、この詩集の驚くべきところは、そうした「時間の淋しさ」を、いわば（ページの中の）「空間の淋しさ」の中に移しかえ、一冊の本として、物として、凝固させているところにあるのかもしれない、とも思います。

こうした「淋しさ」は、あるいは物や時間にしがみつこうとする一種の所有欲の強さからくるのかもしれません。それは感傷であり、弱さなのかもしれない——。この理解が正しいかどうかは分

かりませんが、でもぼくは、そうした弱さを含めて、ぼく自身がこの詩集に限りなく共感するように感じています。

とは言っても、すべてを措いて美しく感じるのは、『Ambarvalia』の、たとえば「……静かな庭が旅人のために眠ってゐる。／薔薇に砂に水／薔薇に霞む心／石に刻まれた髪／石に刻まれた音……」（「眼」）というような、硬質の、強く、光輝くことばです。いつか、扉のページに「薔薇に砂に水／薔薇に霞む心」というエピグラフを刻んだ本が書けることがあるだろうか、というのが、ぼくの「夢のように美しい」一つの夢想です。

（文筆業）

激動の時代を生きた女性たち

牧野　カツコ

夏休みは、どっしりした本を読むのに最適です。読みごたえのある本を三冊、ご紹介したいと思います。いずれも、近代から現代の激動の時代を生きた女性が主人公のノンフィクションです。それぞれ中国、韓国・朝鮮、ヨーロッパがその背景ですので、もしも三冊を全部読まれるなら、世